

川鍋正敏先生記念号によせて

川鍋先生は、本学助手を経て1959年に経済学部講師に就任され、以来1995年3月に定年退職されるまで、本学ならびに経済学部の発展に力を尽くされました。氏は「景気変動論」および「経済学」の講義を担当され、多数の学生の教育にあたられる一方、ゼミナールおよび大学院での指導を通して、多くの研究者を養成されました。この間、立教大学経済学科長、立教大学大学院経済学研究科博士課程前期課程主任、経済学部長兼大学院経済学研究科委員長を歴任され、学部および大学院の発展のために尽力されました。

先生の研究業績は、大きく次の3つに分類できます。その第1は、マルクス恐慌理論に関する研究です。先生は「固定資本の更新および資本主義的生産の制限性の問題について」からはじまる恐慌論の研究において、日本の恐慌論の2大潮流、すなわち、再生産表式における均衡条件を基礎に均衡破壊の論理を導き出し、恐慌の必然性を論証しようとする山田盛太郎氏にはじまる諸理論、賃金上昇と利子率の上昇による利潤率低下に恐慌の景気を見い出そうとする宇野弘蔵氏にはじまる諸理論、に対して、資本主義の運動の動的な矛盾という視点を中心に、恐慌の可能性から、発展した可能性、さらには可能性の現実性への転化まで、恐慌に関わる諸要因を総合的に位置づけるべきだ、とする立場に立ち、再生産論と恐慌論との関連についての分析や、「資本主義的生産の弾力性と膨脹力」「資本主義的生産の制限」など、従来軽視されてきた諸問題の重要性の指摘などを通して、恐慌論の方法論の明確化に努められ、学会に対して多くの影響を与えられました。その第2は「戦後資本主義経済の政策的限界」に代表される現代資本主義についての研究です。氏はこれら一連の論文において、現代資本主義における恐慌の形態変化、特にパニックを伴う激的な恐慌の不在について、その変化の諸条件を分析し、この一貫した視点に立って、スタグフレーションからブラック・マンデー、バブル経済と平成不況にいたるまでの分析をされています。その第3は、旧東欧・ソ連の社会主義経済が抱える問題点の整理と検討を試みたものです。これらの業績は、社会主義経済、資本主義経済双方の問題点についての鋭い問題把握にたったものです。

先生の学会での活躍もまた刮目に値します。特に経済理論学会では、その設立（1959年）に参加、設立時から事務局の仕事を担当、1975年から1995年3月まで幹事をつとめられ、同学会の運営とその発展に尽力されました。また、1983年から1990年まで経済学会連合評議員を、1981年12月から1983年11月まで文部省学術審議会専門委員をつとめられています。

このように先生は、わが国の経済学界において目覚ましい活躍をされ、大学としての本学の権威を一層高めることに多大の貢献をされました。立教大学は、先生の学術上、教育上の功績

の顕著なことにより、1995年7月、先生に名誉教授の称号を贈りました。

先生はいま定年退職の時期を迎えられましたが、経済学部の発展に尽くしてこられました先生のご功績を永くとどめるために、本号を先生の記念号といたします。先生の今後のご健康とご活躍を祈念すると同時に、これまでと変わらぬご助力を本学と経済学部のために賜わりますようお願いさせていただきます。

1995年10月

経済学部長 服部 正治